

佐々木は小久保の部屋に入り、小久保のそばまで近づいて来た。「その言葉、聞き覚えある」佐々木は天井を見つめ、思い出そうとした。やがて、佐々木の顔に笑みが浮かび、小久保を見た「思い出したぞ」佐々木の顔から笑みが次第に消え、硬い表情に変わり、強い眼差しを向けた。「俺の仲間が言ってた……確か安田講堂内で目にしたスローガンだ。お前、全共闘だな」

小久保は佐々木が自分を睨みつけていることから全共闘を快く思っていない事を感じ取ると全身に緊張が走った。仲間が安田講堂内で見たスローガン、仲間……。

小久保は確信した。佐々木は機動隊だ。

佐々木は話を続けた。「だから、あの食堂で得意の演説を披露したわけか。どうだった、久しぶりの演説は。学生運動の頃を思い出せて気持ち良かったか」

小久保は何も返さず硬い表情で佐々木を見据えていた。

「ふんっ」佐々木が鼻で笑った。「警戒心丸出しだな」

しばらくの間、二人は何も言わず睨み合った。

小久保がゆっくりと静かに言った。「お前、機動隊だな」

「警視庁第二機動隊。俺もあの時東大にいた」

小久保の鼓動が一気に高まった。目の前に全共闘の学生と闘った機動隊がいる。鬼の四機ではないが第二機動隊だって強者揃いだ。以前誰かに聞かされたことがあった。機動隊は警官の誰もが就けるものじゃない。どんな危険な状況でも高い身体能力をもって、いかなる時も崩れない精神力で冷静かつ迅速に行動できるものだけが機動隊に選ばれると。いわば警察の中で実力行使を担うエリート部隊だ。

「おい全共闘」佐々木が言った。「驚いたか。まさかお前たちを叩きのめした機動隊が目の前にいるとは思ってもよらなかっただろ。俺は当時のことを今でも鮮明に覚えている。俺たち第二が担当したのは本丸の安田講堂ではなく法学研究室だ。あそこだって安田講堂同様、お前たちの抵抗は厳しいものだったぜ。俺たち第二は屋上からコンクリート片や火炎ビンが激しく降ってくるなか建物に突入すると、今度はコンクリート片に加えてガソリンをまいて火をつけてきやがる。それでも俺たちは前に進み、狭い建物の中で身動きが取りにくい状況でも必死に闘った」その時、佐々木の脳裏に東大法学研究室に突入した時の光景が浮かんだ。法学研究室に突入するとすぐに建物内に不快なガソリン臭が漂っているのを感じた。その途端、突然目の前が炎の壁に遮られた。学生がガソリンに火をつけたのである。そして佐々木の前にいた仲間の隊員に火が移った。佐々木と他の隊員は仲間が火だ

るまになる前に隊員についた火を消しにかかった。その時でさえ、上からコンクリート片が機動隊員の頭上に投げつけられてくる。佐々木たちはそのコンクリート片をジェラルミンの盾で防ぎながら仲間を助けていた。「今思えば地獄絵図だ。殉職者はでなかったが、何人もの仲間が負傷した」

小久保は何も言い返さず、黙って聞きながら思った。さて、彼の話はどこに行き着くんだ。

「お前たちがやったこと、今の大学生には理解できないだろうな。まあ俺も理解できないし、理解しようと思ったこともない」

「俺たちは水と油の関係だな」

「俺とお前に関係性といえるほどのものはない。俺からしてみればただの犯罪者だ。日本を変えるか何か知らんが、俺はお前たちのようなでかい思想を持ち合わせていないんでね。俺にとっちゃ、お前たちは安田講堂を本丸にして構内複数の建物に立てこもり、日本の治安を乱した学生。ただそれだけの存在だ」

「俺も許しを乞うつもりはない。それに許しを求める理由もない」

互いがしばらく睨み合った後、佐々木が鼻で笑った。「まさかこんな所で全共闘と会うとはな。考えてもみろ、昔は互いに殴り合っていた者同士が今では同じテーブルで食事をしてる。こんな結末、想像できたか」

「これこそ腐れ縁ってやつだ」

「言えてるな。確かお前の名前は小久保、だったな」

小久保はうなずいた。「お前は佐々木」

「佐々木康二だ。なあ全共闘さんよ、よく施設に入ってきたな。お前たちみたいな連中には全く似合わない場所だ。窮屈な生活を強いられ、自由がない。お宅ら思想家もどきには縁が無い場所だ」

小久保は何も言わず、返事を返すことはなかった。

「そうか」佐々木は感じ取った。「お宅、入れられたくちだな」

「自分の意思は選択肢になかった」

「で、諦めたのか。施設に入り、施設の決まりに従い我慢を強いられ、過去を懐かしみ、今を憂いながら生きていくレールに乗ったわけだ」佐々木は車いすに寄り掛かった。「俺もあんたと同じで自分の意思は選択肢になかった。俺はここに入る前は別の施設にいたんだ。病院から出る事が決まった時、息子がここを申し込んだが、部屋に空きがなく順番待

ちになった。それで部屋が空くまで、俺は違う施設に入ることになったんだ。確か介護老人保健施設っていう施設だ。そこに数ヶ月いたかな。そこに入り、数ヶ月が経ち、やがてその生活に慣れ始めた。職員とも慣れた頃だった。そんな時、急に息子が俺に言ってきた。申し込んだ施設に空きが出来たから、ここに移るってな」佐々木は話をやめ、小久保をしばらく見つめたあと再び話し始めた。「物事がいつも俺の知らないところで動いていた。そこには俺の意見がはいる隙もない」そう言うと佐々木は鼻で笑った。「人生ゲームのルーレットのように勝手に決められる。そして入所する施設が肌に合うか合わないか、蓋を開けるまで分からない。まるでロシアンルーレットだ」

確かに佐々木の言う通りかもしれない。小久保は思った。病気になった途端、周りに振り回される人生が始まった感じだ。

佐々木は視線を小久保からそらすと、独り言のように話し始めた。「安田講堂だけじゃない。俺たちは様々な場所へ赴き命を懸けて職務を全うした。そしてあさま山荘では二名の仲間が殉職した。そのひとりが第二機動隊隊長、そう俺の隊長だった。隊長はあさま山荘に突入開始後、連合赤軍が撃った銃弾により命を落とした。隊長は二機の隊員が死ぬなら自分が最初だって言っていた。その言葉どおり逝ってしまった」そう言うと佐々木はおおきく息を吸い込むと、ゆっくりと吐き出した。

「あさま山荘事件……」小久保はあさま山荘事件を思い返した。あれは安田講堂から三年後の昭和四十七年に起きたテロ組織の連合赤軍が軽井沢にあるあさま山荘で管理人の妻を人質に立てこもった事件だ。当時テレビで生放送されていたあさま山荘事件の映像が小久保の脳裏に浮かんだ。機動隊による鉄球で山荘の壁を破壊するシーン。そして機動隊員が銃で撃たれ、血を流しなら担架で運ばれるシーンも……もしかしたらあの映像に映し出されていた機動隊員が佐々木の隊長だったのだろうか。隊長が殺された悔しさ、恨みはきっと佐々木の心からは消えていないだろう。小久保はそう思ったときに、ある疑問を抱いた。佐々木は全共闘も連合赤軍もテロ組織と考えているのだろうか。小久保は確認するため佐々木に言った。「これだけは言っておく。全共闘はテロ組織とは違う。奴らは銃や爆弾こそが革命を成就させると考えているが、全共闘はそんな馬鹿げた思想は持っていない」「安心しな。あのカルト集団と同じとは思っていない。お前の胸ぐらを掴んで殴ろうとはせん。しかし勘違いするな。恨んでもいないが、お前たちを理解したわけじゃない。間違っても俺に握手なんか求めるなよ」

小久保は佐々木の足の方に視線を下ろした。小久保が視線を移した先は、以前、佐々木

の右の足があったが、今は義足が付いている部分だった。小久保は義足を見つめながら思った。あの足はあさま山荘で負傷したのか。

「俺は」佐々木が言った。「国に四十年間尽くしてきた。時にはあさま山荘のように銃弾が飛び交う中、身の危険を顧みず、恐怖の感情を抑え国民の安全のために身命をなげうって尽くしてきた。その見返りがここの生活なのか」

佐々木は小久保に近づき、彼の腕を力強く掴んだ。「俺は諦めない、必ずここから抜け出してやる。ここで諦めたら、周りのような奴らと同じになっちまう。何も喋らず、いつも同じ風景を見て、何の刺激もない毎日を過ごしながら、やがて来る終末を待つ……。そんなのはご免だ」佐々木は小久保の腕を離した。「俺は受け入れん。障害があろうがなかろうが、俺の生き方を周りの連中が勝手に決めることはさせん。俺の生き方は俺が作り、進むだけだ！」

佐々木は車いすを動かし始めた。「またな」そう言うと、ドアに向かい始めた。途中、車いすを止めると、車いすを小久保の方へ向けた。「なあ、全共闘さんよ。あの時、お前たちはなにをしたかったんだ」

「俺たちは大学全体の運営、自治、学生の位置づけへの不満が限界に達し、行動を起こした。大学が学ぶ当事者である学生を主体として扱うこともせず、常に決定は上から一方的に下される体制の改革のため立ち上がった」

佐々木はなにも言わず、しばらく小久保を見つめた後に言った。「俺は生きている証を実感したい。お前は今でもあの頃のような熱い信念を持っているのか」そう言うと、小久保に背を向けて部屋から出て行った。

小久保は部屋から出て行く佐々木の後ろ姿を見つめていた。佐々木の姿が見えなくなり、しばらくすると佐々木の声が廊下に響き渡った。「おい全共闘！ 東大もここも同じように感じないか！ 昔のような気概がまだ残っているのなら、もっとシュプレヒコールをあげ続けてみる！」

小久保は静かに呟いた。「そうだな」そして佐々木が消えた廊下の先に向かって叫んだ。「要求がとおるまで安田講堂のようにバリケードを作り、籠城してやるさ！」

廊下に出た佐々木は小久保の声を聞くと、車いすを止め小久保の部屋の方に車いすを向けた。表情は陰しく、鋭い眼力で小久保の部屋を睨みつけた。しかし、すぐに佐々木の表情が緩み、口元に笑みを浮かべた。「その時は俺が一番隊としてバリケードを崩してやるよ！」そう叫ぶと車いすを戻し、つぶやいた。「籠城、それも悪くないな」

佐々木は前を見つめながら思った。あの頃の俺は今の俺と比べれば『生きて』いた。

佐々木は姿勢を正し、大きく息を吸ったあと号令をかけた。

「警視庁、第二機動隊！ 前え進め！」